

12. 井上浩一郎他：中国雑草研究 1 (1968), 70~74
13. 谷浦啓一：日雑研 9 回講演会要旨 1970
14. 堀親郎：雑研 4 (1965), 49~53
15. 中川恭二郎・服部金次郎：日雑研 10 回講演会 1971 158~161
16. 伊藤夫仁：中国雑研 1 (1968), 75~79
17. 植木邦和他：雑草研究 8 (1969), 50~56
18. 松原秀夫・中村弘：雑草研究 8 (1969), 56~61
19. 土井健次郎・中島秀樹：雑草研究 5 (1966), 76~80
20. 高橋昌一：農薬通信 68 (1966), 17~21
21. 武田昭一他：雑草研究 4 (1965), 53~57
22. 中川恭二郎・宮原益次：雑草研究 5 (1966), 110~114
23. Smith R.J. and W.C. Shaw : Agr. Handb. 292 1966
24. 野田健児・大林弘之介：雑草研究 11 (1971), 35~39
25. Levl E : J. Aus. Agr. Sci., 25 (1959), 62
26. Fryer J.D. : Weed Control Handbook 5 版 1968
27. 宋載炎・張訓舜：台湾西部耕地雑草調査民国 53 年
28. 野田健児：農薬 16 (1969), 8~13
29. 高橋周寿：農薬 19 (1972), 43~47
30. 野田健児・江口末馬：日雑研第 8 回講演会要旨 1969, 77~79

韓 国 管 見 (1)

農林省園芸試験場・そ菜部 西 貞夫

は じ め に

昨年，8 月 7 日から 21 日までの 2 週間，韓国を訪問した。5 年前について 2 回目の訪問である。前回は東南アジア野菜研究所設立に備えた国際調査団の一員として訪問したもので，公式の日程が多く，個人的に自由な時間が少なかったため，わずかにソウルと釜山を訪ね，1 週間を送ったにすぎなかった。今回は韓国園芸学

会の招きによる訪問で，公式の訪問地はソウル，水原，釜山だけであったが，一昨年完成したばかりの釜山・ソウル間ハイウェイを北上して，5 日間の自動車旅行をする機会も持てたので，前回よりは見聞の範囲をひろげることができた。しかしわずか 2 週間の滞在であり，ハイウェイ沿いの地域を眺めたに止まるので，東支那海寄りの地帯のことはわからず，また韓国語が全く

理解できないために、一般民衆との接触はほとんどなかったといってよいので、以下に述べることは、文字どおり“管見”ということになることを、予め申しあげたい。外国の印象記というものを多数目にする機会があるが、それらの多くが観察者の心情やある種の予断・期待感の反映にすぎないことが多いことは、日本についての外国人の手記をみれば明らかなことであるから、筆者の管見記もおのれの知能の程度をさらけ出すものになりかねないが、この近くて遠い国に対してわれわれはしばしば不当な偏見を持っているようにも思われるので、各位の判断に一つの資料を提供するという心構えで、以下に韓国のあれこれと野菜栽培の現況を紹介してみたい。

ソウルの街

前回の訪問は、ベトナム戦争に米軍が介入をはじめ、戦斗が本格化する時期であった。日本人の訪韓がようやく正式に認められたという時点で、筆者らの訪問は日本からの産業視察団の第一陣と重なり、ソウルの主要なホテルは占領されて、筆者らは都心から離れた反共の塔近くのホテルに宿泊した。町は全体にほこりぼく、灰色の町という印象であった。今になって考えると、その折は東南アジアの熱帯で1か月以上をすごし、沖縄から直接4月のソウルに着いたので、一段と緑の乏しさが気になったのであろう。早朝から町並をリヤカーを引きながら金切り鋏を鳴らして歩くバタ屋のにぎやかなこと、オンドルルに使った煉炭灰のほこり、そして町全体の統一のなさが気になった。“貧しさ”が適当な表現であった。

今回の訪問で目を見はるほど驚いたのは、そのソウルの変貌であった。なれてくるに従って、

その裏にある経済のからくりや、いささか忸怩たるものを感じるがいわゆる外国人ののぞき趣味によって知られた“韓国内幕”などもわかって、むしろ同情的にすらなったが、金浦飛行場につき、自動車を走らせ、林立するといってよい高層ビルやアパートの群をみた時は、全く別の都会に下り立ったのではないかと疑った。5年の歳月はソウルの表情を全く別のものとしてしまったのである。

5年前のソウルは町の雑踏も気にはなったが、それ以上に憲兵と警官の多いことが目について、嗚呼この町は17度線に近いのだなあと思ったが、今回はそのようなことも少なかった。もっとも到着の翌日曜日ソウルの町を自動車で観光した折、大統領官邸の裏山一帯を、グリラから隔離するため、撮影禁止のペープされた軍用道路が巡り、死角がないように立哨が配備されているのを見た時は、改めて国家予算の50%を軍事費に当てているこの国の悩みを、かい間みる思いがした。その大統領官邸（青瓦台）を抱えている裏山からソウルの町を一望におさめることができるが、10階20階のビルが建ち、現に多数が建築中である。最高のもは31階建てで、通りの名前も31通りと改められている。ソウル全体が石灰岩の上にある町とかで、そのため山に緑が少ないのであるが、反面、建築のほうは比較的高層でも容易ということであった。5年前には旧日本時代のホテル（10階程度）が最高であった。

馬鹿ほど高い所に上りたがるといっており、小生は高いものが大好きなので、これらのビルには大いに感銘したが、後になってそれらの多くがベトナム戦争で不当な利潤を得た人々の財産であったり、政府高官が関係しているというような説明をどこでも聞かされてやや暗い気持

になった。

“韓国をどう思いますか”

前日も今回も公用旅券による入国であるから、税関その他で不愉快な思いをしたことはほとんどなかったが、韓国の人々の対日感情にはある種の底流があると聞かされて訪問したため、いろいろ気をつかう場面も多かった。とくに前回の訪問は日韓雪融け直後というわけで微妙なことが多かった。たとえばタクシーにのったり、農林庁さし回しの自動車にのっている時に、運転手から不意をつくように何気なく、“韓国人の印象はどうですか、韓国をどう思いますか”と問われることが兩三度あった。踏絵である。そこで心やましき、あるいは心やさしき日本人は、口をきわめてこの国の素晴らしいことや風景の美しくさ、人々の親切などをほめたりする。そうすると相手はニヤリ笑って横を向くか、その然らざるを述べて日本帝国主義の搾取を責め、日本人の横暴によるこの国の悲劇を語って、赤面させることが多かったと後になって聞いた。私はそのような問いに答えて次のようにいった。私は戦前の教育を受けており、韓国は弱国なのでわが国が保護していると子供の時から教えられた。したがってある種の偏見を持って育ってきたといってよい。韓国人の友人も多くあって仲のよいのもずい分いた。しかし日本にきた一般の韓国人は男は下級の労働者かアメ売り、バタ屋、女は正業ならざるものが多かった。だから当時の世相からいって彼らを尊敬するという気はしなかった。これは偽らざる実感である。私の父は関東大震災の時、当時の韓国人が自警団に迫害されるのを防ぎ、数人の死を救った人間だったけれども、それは彼が医師であったからでもある。いっぽう大戦前に韓国に渡った日

本人といえ、すぐれた人も多かったであろうが、一般の韓国人と接した日本人の多くは、軍人や警官であり、民間人は一旗組か占領者としての日本人であったであろう。そうするとお互に必ずしも代表的な民族像同志が接触したわけではなく、お粗末な韓国人とお粗末な日本人を通して、お互の印象を作り上げてきたといってもよいように思う。そうだとすると双方、よい感じを持つわけがないではないか。だから自分は韓国人がすぐれた民族だなどと簡単にいう気はないし、貴君方からも日本人全般に対する良い印象などを期待していない。しかし今後は違うのではないか。今後は双方が対等の立場でつき合い、双方の正常な人間像を通して交流を深めて行くのだから、よい関係を樹立し、さらにそれを発展させることができると信じている。すべてこれからだろうと。

韓国人は守礼の民であり、儀礼正しき民でもある。長幼序ありの精神を始めとして衰えたりといえ未だに儒教精神の横溢する国でもある。したがって私は上のような感想を述べることに若干の逡巡を覚えたのではあったが、結果は上々であって、貴君のように遠慮ない意見をいう日本人は珍らしく、大多数の日本人は妙に韓国や韓国人をおだてたりへつらったりするが、それは優越感の裏がえしであることが多いので、素直に受けとれない、ありがたうというような返事であった。韓国人は知能的にも体力的にも個々人では日本人よりすぐれた人が多く、われわれの学ぶべき場合が多い。しかし韓国の知識人がつくづく実感として述べるように、2人となると日本人のほうが協力した力を発揮するようになって対等となり、5人とまると絶対的に日本人が優越した能力を示すようになるという。韓国人はきわめて自尊心が高く、人の

下につくことを好まない。また他人の成功に対して、自分ならもっと別のやり方で良くやってみせるといふ闘争心にとらわれやすい。その結果、しばしば共同・協調して事に当たるといふ能力に欠けるところがあるといふのである。日本の歴史書のあるものは、そのような民族性が、大陸の末端に位置して、しばしば他民族の征服を経験した韓民族の必然性と説くけれども、筆者の知る限りでは、すでに高度の文化を身につけた韓民族の国に、赤フンドンで裸のまま舟を操る日本人が押し寄せ、国王を虜にして帰るといふような蛮行の歴史もあるので、その所以については簡単に口にすべきことではあるまい。

韓 国 の 影

韓国の国土面積 94189 km^2 、 28377 千人、農業人口は約 45% というから、第2次大戦前の日本の状態と思えばよい。もともと韓国は農業地帯であって地下資源や水力発電の適地などに乏しく、北朝鮮と合わせて民族的にも、経済的にも（完結した）暮しの可能な国柄であった。筆者には朝鮮半島の政治情勢にまで触れる能力はないが、南北に分断されていることがいかにこの国の発展を妨げているかは、折に触れてわかることであり、同時に南北が不幸にして相争った朝鮮戦争がいかに無益な消耗をこの国に強いてきたかも容易に理解されることであった。 10 a 当たり良くて 350 kg という水稻の収量（わが国は平均 442 kg ）は、相続制度の特殊性のため、極端に経営面積の小さいこの国の農民の生活を脅かし、若者を都市に追いたてている。農民の年間現金収金は一説によると年 $5000 \sim 12000$ ウォン（ウォンはほぼ円と同じ）であり、春さきになると食糧の底をつく絶糧期がくる。敗戦後の日本同様都市にすれば何とか食べるこ

とができるということで、男女の若者は大都市に集中する。その結果5年前は 350 万人と教えられたソウルの人口は、今や何と 550 万人である。簡単にいうと全人口の5分の1がソウルに集中しているのである。ソウルの雑踏は平日もすさまじく、さすがに外出禁止令の発効する12時には全く人影は無くなるが、その前の繁華街は常に肩と肩とがふれ合うという状態である。一つには住宅事情が悪くて、一部屋に一家 $8 \sim 9$ 人という例も多いので、若者はそれを逃れて街に出るとのことであるが、はじめは活気にあふれるとみた街の喧騒も、やがては、この国の人々の悩みのあらわれかと理解されるようになる。韓国の人々はきわめて名誉を重んずる。悪くいうとメンツ・体裁にこだわる心情が濃いという。経済事情が悪いため刹那主義もあってか、若者たち特に女性は派手な服装をして街を歩く。日本の服装雑誌の売れゆきは文字どおり飛ぶようである相で、ミニスカートも普及している。しかし戦時下にある国だけに極端なミニは警官に注意されるし、長髪族は逮捕のうえ斬髪されるという。食事についてもわれわれの目からみると無駄あるいはぜい沢に映ることが多い。ちょっとした昼食にも 10 以上の皿数がたちまちにして並ぶ。唐辛子がきいていて、われわれの口に余るものもあるが、韓国の人々もすべてを平らげられるわけではない。昔の中国料理式に、残りものを使用人が食べるのかと思ってもみたが、片付け方から察するとそうとも思われず、結局廃棄処分に付せられるようであった。食糧が不足していて、大統領がみずから水田に入って範を示す国なのだから、もう少し日常の食事を節約したらどうかなどと、敗戦後の3年を昼食抜きのスイトンとオジャですごした筆者には思われたが、やがてはせめて着る

ことと食べることくらいには、見栄を張るといわれるくらいに金を使いたいのだということかもと理解された。人口の5分の1が集まるのであれば、ソウルでは当然労働力の過当競争ということになる。したがって第三産業の充実していることは、食事に入るたび、買物をするたびに店員をぶんなぐりたい衝動に駆られるようなサービスに恵まれている日本人に、随喜の涙をこぼさせるほどである。飲食店の女子店員などは食事付きで1か月2000ウォン程度の給料とのことであったが、客は大体1回につき500ウォン程度のチップをやる習慣となっているので、良い店で働けば比較的楽に暮らせる（生きていける）とのことであった。しかし男の店員のほうは、食べさせて貰うだけで働いているものが多いといわれていた。

ソウルから釜山まで、台風の前触れといわれる大雨の中を、“観光号”という特急で走った。約4時間半の旅である。広軌で日本製とかの客車は、新幹線のグリーン車といったところで、例によって乗務員のマナーは良く、車内売りのサービスも良い。窓の外は真暗で、駅を出ると何も見えない。始めは台風のためか、あるいは無人の地域を走っているのかと思ったが、そうではなくて農村に電気がないためとわかった。朴大統領の次の公約は、“農村に電気を”であったと聞く。わが国にも東京都の無灯地帯があるから偉相なことはいえないが、韓国の農村が公共施設以外大体無灯とは知らなかった。そこにも人口の都市集中を招く要因のあることが知られた。農村の経済水準の低いことが、まわりまわってこの国の経済レベルの低いことに連っていることは理解できたが、その低さはソウルの近代的発展と余りにも対比的であるように筆者には感じられた。その後釜山からハイウェイ

を通して北上する折、再三にわたって農村地帯にわけ入ったが、多くは二間の建物で、一方は土間となっており、家全体は荒壁づくりで家具も多くはないようにみられた。しかし多くの子供は夏ではあったが、いかにも近代的なデザインの服を身につけており、はだしの子の数などはむしろ少なく、筆者は自分が子供の時の日本の一部農村がもっと貧しかったことを思い出して、感慨にふけた。一般の農民は白い韓国服を身にまとい、女は頭で荷物を運ぶ。その衣服が韓国人の洗濯好きを反映して、まばゆいばかりに夏の陽に映えていたこと、そしてすべての人がいかにも悠々と往き来していることは、その辺りの住宅の必ずしも豊かとは思われない外見をも忘れさせるほどであった。

韓 国 の 光

ソウルの街の建築ブームについては前に述べた通りであるが、ソウル特別市全体が手狭まになってきたので、漢江の中洲に国会議事堂を移して政治の中心とし、対岸一帯を整地して、新ソウル地域とする計画が進行している。その地帯は活気にあふれており、完成図を示す大きな絵看板がハイウェイに面して建てられている。現在のソウルは正に人口集中の極限に来ていて、違法建築が市内の高台の頂上にまで密集している。これらは電気・水道も無く、崖ともいえる道を辿ってようやく往来できるというすさまじさであり、幼児の転落事故が頻発するという。衛生施設などの点でも不十分なので、政府は一応それらを違法として取り扱ってはいるが、現実には一向に取り締るわけでもない。この点でもまさに敗戦直後の東京と同様といえる。そこでようやくにして低家賃(?)のアパートを建てて、ブラックともいえるそれらの住宅から住

民を移すことが実行に移り、最初に述べた特定の地区に林立するアパート街の出現となったのである。また新ソウル計画は、人口問題処理の一部として進められているのである。新地区建設の問題は、ご他聞に洩れず土地の取得にあったようだが、事情はやや日本とは違っている。韓国人々は朝鮮動乱の折に示された北軍（共産の軍と力説されるが）の徹底した粛清ぶりに、現在も抜きがたい恐怖感と反感とを持っている。理由はよくわからないが、今でも毎月10を単位とするスパイが南に潜入しては逮捕されている。戦争はつづいているわけである。したがって北からの侵攻に常に備えるということが一般の常識になっている。もちろんこの中には軍事政権を維持するための誇張もあってのことと彌次馬的にいう人も多いが、北軍の実績（？）については到る所で聞かされる。その結果、韓国地価は南に行くほど高い、というよりは北に近いほど安いのである。ソウルは地図でみれば明らかなように、17度線上の有名な“板門店”（パムムンジョム）まで、自動車で1時間40分、距離にして約48kmしかない。現在の軍事力・兵器の速度からみるとこの程度の距離は無いに等しいともいえよう。またソウルの中での南北など問題にならないと思うのだが、現実には一歩でも少しでも南に寄りたい、北から離れるほうが安全というわけか、地価は南ほど高いのである。その結果南よりの新市街地計画予定地の地価は思惑もあって高騰し、反対に旧市地域の地価が下るといふ現象を呈している。もっともこれが計画を阻害したとは聞かなかった。

このような北鮮に対する警戒心は、日本人の想像を絶するもので、韓国の大都会と海岸沿い（ゲリラは舟で来るので）の町々は、夜12時から翌朝4時半まで外出禁止となっている。外

国人には適用されないけれども、すべての店がしまり、バー・キャバレーの類から自動車まで一切無いのでは、外国人といえども困るであろう（と筆者は想像する!!）。そこで帰宅の時間を控えた夜11時すぎの自動車の奪い合いやバスの混み方はすさまじく、その時間のキャバレーなどは、客もホステスも立ったまま飲み食いし、時間を気にしつつ騒ぐという情景を呈する。内陸の一部（たとえば、ソウルから南にハイウェイで1時間余り、学術の都として知られる清州など）や奥まった観光地では、この外出禁止令が適用されていないので、深更まで人の出入りがある。しかし総じて、日本人よりは節度があるやにみうけられる。

韓国は現在軍政下にあるのではないが、軍の勢力の大きいことはいうまでもない。要職のほとんどが、軍人で占められており、特に朴大統領とクーデターを共にした同志の進出が大きい。軍隊式にすべてを処理するので、しばしば経済が硬直すると指摘されているが、試験研究機関にまで及ぶことがあるらしい。作業の一つ一つ、試験段階の一つ一つに評点がついていて、最終的に満点になるよう仕組まれており、目的を達しない分だけ減点となる。天災や事故についてあまり考慮されないし、試験研究のもつ特殊性（Trialsであるという）も余り認められないという。これこれの目標を達成せよという命令に向って邁進するわけであるし、軍隊式の信賞必罰の思想が貫かれているから、研究者としては相当に神経を消耗するとのことである。このような方式の欠点を指摘することは容易であるが、日本のある種機関のように、試験はすることの意味があると考えているのではないかと疑われるようなやり方、責任の所在の明らかでないやり方と、いずれが国民に奉仕するものであ

るか、疑問の点もある。しかしこの軍隊式の直情径行的なやり方が、息のつまるような感じを国民に与えていることも確かで、それに韓国に残っている家族主義的な封建制度が輪をかけ、若者を現実逃避的にしているといわれている。

儀礼・郷党

韓国は儒教の国であり、伝統的に家族制度の確立された国でもある。姓氏制度からもそのことが知られるが、現在でも一応の水準の家庭では完全な家父長制度・男尊女卑的な傾向が強い。両親に対しては朝と就寝前に挨拶にまかり出る。年長者（親・職場の上司・同席した知人）の前で、煙草はすわないし、酒を飲むなどは言語道断の無礼とされている。したがって、日本人の旅行者などは、町で煙草に火をつけるため、年長と思われる他人にマッチを貸して欲しいなどと話しかけることは、その無礼を手ひどく罵られるものと覚悟する必要がある。その代わり同族意識・郷党意識がきわめて強く、同族中の誰かが社会的・経済的に成功者になると、忽然として親類縁者が多数出現して寄食すること、わが国の芸人（能はないので入れない）社会のごとしであるという。そして遠い田舎の縁者がソウルに訪ねてくれば、良い顔をして数泊させ、帰りには5000ウォンものお小遣を持たせてやらないと、あとで徹底的に悪口をいわれるという。このような慣習について批判することは容易であり、これが政治家や高級官僚の汚職・収賄をすすめる根元であることを、韓国の心ある人は認めているが、反面このような相互扶助的なシステムによって生活が成り立ち、経済的破綻の救われていることも疑ないところらしい。

郷党意識についても数多くの話題を開かされた。わが国でも県人会組織の盛んなことは周知

のことであり、筆者の郷里である新潟県人の関東・東京におけるいにしえの団結ぶりなどは、いささか鼻白む思いのするものであったが、韓国ではその程度がさらに徹底しているらしい。大体韓国の人の姓はきわめて限られており、一説によると、多い順に金・李・朴・張・文の5姓で全人口の5分の1を占め、ソウルの街で石を投げれば金さんに当たるというほどである。このように同姓が多いので、同じ姓であっても出身地が何処であるということが重要な問題になる。一つは同族結婚を避けるということも目的であろうが、各姓に出身地の説明（これを本貫という～日本の本籍に当たるか）がつく。そして同じ本貫の同姓同志の結婚は絶対に許されない。何しろ各家の家系図に関する事務を取り扱う一つの役所が設けられているほどであるから、その程度は徹底している。したがって若いカップルが恋におちても、もし同姓であれば、まず本貫を確かめ、同じとわかれば恋愛をも諦めるということのようである。そしてこのようなケースは決して珍らしくないということであった。そこで今度は同じ本貫の人々に対する郷党意識が一段と強くなることになる。出身道による人物評価が異常なほど徹底しているらしいが、一部の道に対しては一種の輕侮感をこめた差別も行なわれているという。朴大統領は慶尚北道の善山という寒村の出身者であるが、現在の朴政権は“慶尚道政権”と呼ばれるほどに、郷党の進出が著しい。朴大統領自身は実兄が未だに郷里で農業に従事していることから知られるように、個人的な身辺は清潔であると尊敬されているが、同郷意識ともなると格別のようにある。朝日新聞の岡井輝雄記者のレポートによると、国会議員、長・次官、党指導者、外交官、高級公務員など政官界の指導的人物の内、慶尚

北道出身68人(13%), ソウル出身65人(12%), 慶尚南道出身59人, 忠清南道が52人の順で, 慶尚両道で127人の一大勢力となっており, 金融関係や実業界の指導的立場にある326人のうち, ソウル出身52人について慶尚北道47人, 同南道43人の計90人となっているという。“東亜年鑑”の人名録に収められた有力22職種の人物2178人の出身別は, ソウル367人, 慶北242人, 慶南209人, 京畿176人, 忠南164人が主たるものとなっており, “このような地域的偏差が, 近代化や全体の均衡的発展を阻害する大きな要因となっている”と評者が述べているほどである。このような偏差の中には, 歴史的な経緯もあり, 教育普及の程度や経済的偏差の反映が含まれているのかも知れないが, それにしては極端にすぎるといわれている。その結果“社会浄化の使徒”として歓迎され, “清新なナショナリズムの発露”と賞賛された朴政権が, その安定故の腐敗を懸念されるようになってきたことは, わが国の日刊諸紙も伝えるとおりである。韓国の近代化を阻んでいるものは, 他国人の理解しがたい民族の体質や, わかっていても打破することのできない“非合理的な合目的々, 社会的慣習”の中にあるのかも知れない。

ナショナリズム

韓国の現状をささえている力の一つにナショナリズムがある。日韓サッカーにおける韓国選手のハッスル振り, 観客の異常ともいえる熱狂は, かつての日本帝国に対する反感もあろうが, 国際社会における韓国の政治的・経済的劣位を, はねかえそうとするナショナリズムの現われに相違ない。そのようなナショナリズムの現われの一つが“ハングル戦争”であろう。今回ソウ

ルの街に出て驚いたことの一つは, どこを見渡しても町の至るところマルや直線や四角やカギ状になった記号の組み合わせ(としか日本人にはみえない)のハングルだらけで, 漢字や看板は中華料理店や特殊な店に限られている。駅名も地図も新聞もすべてハングルで書かれ, 5年前は看板をみながらウインドー・ショッピングを楽しめたのに, 今回は何のことやら見当もつかない仕儀であった。“ハングル専用化5か年計画”が進行中で, 第1段階としては公文書のハングル化, 第2段階が大衆向け定期刊行物, 第3段階が特殊な研究誌などを除いた全刊行物のハングル化であって, 1970年の1月からそれが実行に移されたのであった。筆者は旅行中にワンダーフォーゲルの学生, 旅館の従業員, 特急列車の女子車掌などの写真を取り, 帰国後の郵送を約束して住所氏名のメモを貰ったが, その大部分は未だに, どの何という人か判読できないままに, ハングルのうつし書いて送ったほどである。ハングルには1446年に世京大王という名君が制定公布した独自の文字であるが, これを用いることによって現在教育漢字とされている600字の漢字の使用も止め, 文盲を退治して, 大衆の文化向上に資するというのであるが, さてそうなるとアジアの漢字圏諸国との交流や, 漢字書古典の翻訳, ハングルにない言語の取りあつかい(たとえば自動車, 電気, テレビジョンなどなど520年の昔にはなかったものの名称), 印刷技術上の問題などと困難な問題が山積して知識人の批判・非難のまゝとなっている。また現実的な問題としては, 日領時代に小学校教育を受けた40代の人々の中に, 発音どおりにハングルで表記することのできない人が相当にあり, 子供に誤りを指摘されますと頭をかいでもいた。(この項つづく)